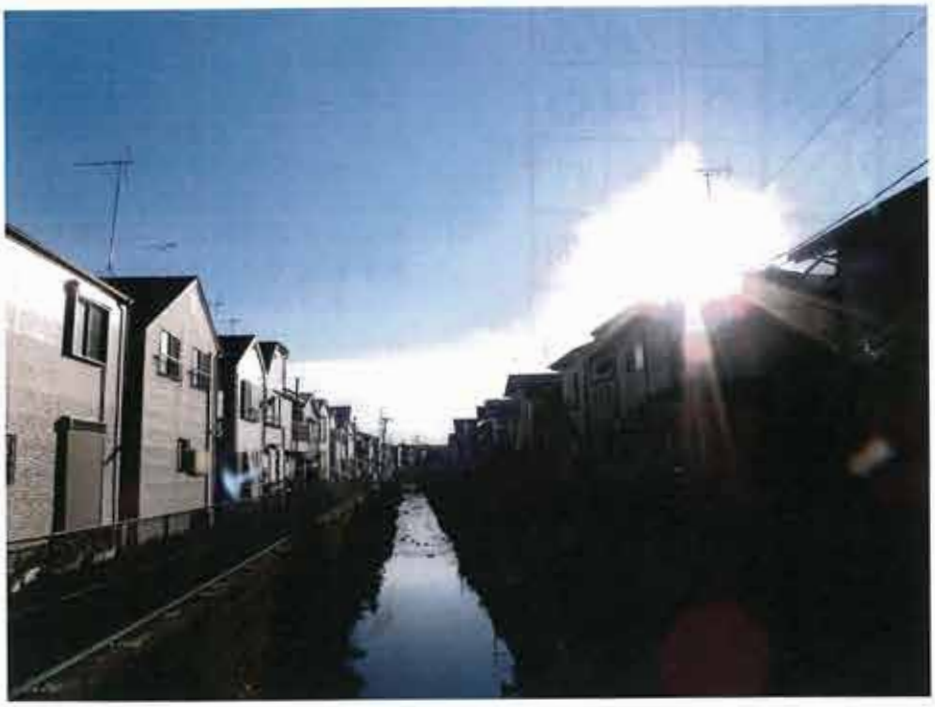
白子川源流通信

2014年12月　第43号
「白子川源流・水辺の会」会報紙

■創作『神様だけが知っている』
■第14回白子川源流まつり報告
◆連載 白子川現代史③
◆連載 源流探歩④
□定例活動報告

白子川な風景 7

縁橋から



師走の午後のせわしない光が
白子川を渡りきる頃、
明るかった家々が暗転していった。

キリコの絵のような静寂の中で、
子どもの声、はばたく水鳥の音、
魚がはねた波紋、
散歩する人々の笑い声…。

この源流風景、いつまでも続いてほしい。

川沿いを散歩してみよう、
川の中をのぞいてみよう、
たまには、川活動に参加してみよう。

みんなの白子川（川～生き物～人のつながり）
を実現するために。

（写真・文／菅沢 博）

定例活動報告

9月　10月　11月

11月定例活動の調査で、20㎝以上の大きなフナを捕獲。捕ったのは、少年隊長の井口くん。

■源流域・水の測定データ

測定地点	項目＼日	9/28	10/26	11/23
	天気	☀	☀	☀
	気温℃	25	源	19
源流部	水温℃	21.5	流	17.1
	水深cm	23	ま	23
	PH	6.7	つ	8.0
井頭橋	水温℃	21.7	り	15.1
	水深cm	31		33
	PH	6.9		7.9

※このほか、透視度、電気伝導度、COD、川幅、堰の流量などを測定している。PH は水素イオン指数で、PH7 が中性、これより大きいとアルカリ性、小さいと酸性を示している。

■白子川源流域と生きものの様子

豊かな湧き水とカワモズク

今年の雨による異常気象は、白子川の一年を通しての水量の多さとなって現れている。これまで、源流まつりの時に水がどのくらいあるかということは、ペットボトルイカダや魚捕り仕掛けの引き上げ、メダカの放流などのイベントができるか否かの重要な条件だった。今年の源流まつりでは、渇水のない夏をへて十分な水量があり、そんな心配をすることもなかった。しかし、冬場、そして春先にかけてと、また渇水の時期に入る。雨だよりの源流域の湧き水は、この先大丈夫なのだろうか？

湧き水の多さは、ここに生息する動植物の生態にも様々な影響を与えているものと思われる。その一つを紹介しよう。

きれいな湧き水の流れがあるところにしか生えないカワモズクがこの白子川にある。それも、会員の岡崎さんの報告によると、専門家の鑑定で絶滅危惧種に指定されている貴重なニホンカワモズクだったことが分かった。ニホンカワモズクの特徴の一つは、他のカワモズクが夏期消滅してしまうのに対し、年間を通して出現する。…ということは、一年を通してきれいな湧き水があることを意味する。

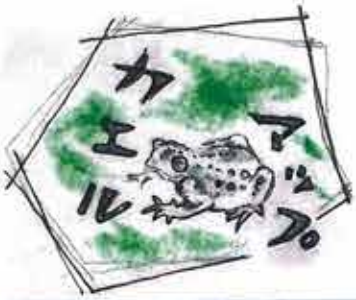
このことは、白子川を守ろうと活動してきた私たちの使命を、よりはっきりさせてくれたように思える。

この川の湧き水を涸らしてはいけない！

創作アズマヒキガエルくんの気持ちになって、カエル博士の池田さんは必死に訴える。「湧き水が起点になってる一級河川は、東京23区内でここだけ。ここを守るのは自分たちしかいない！」と。　（東谷貞子）

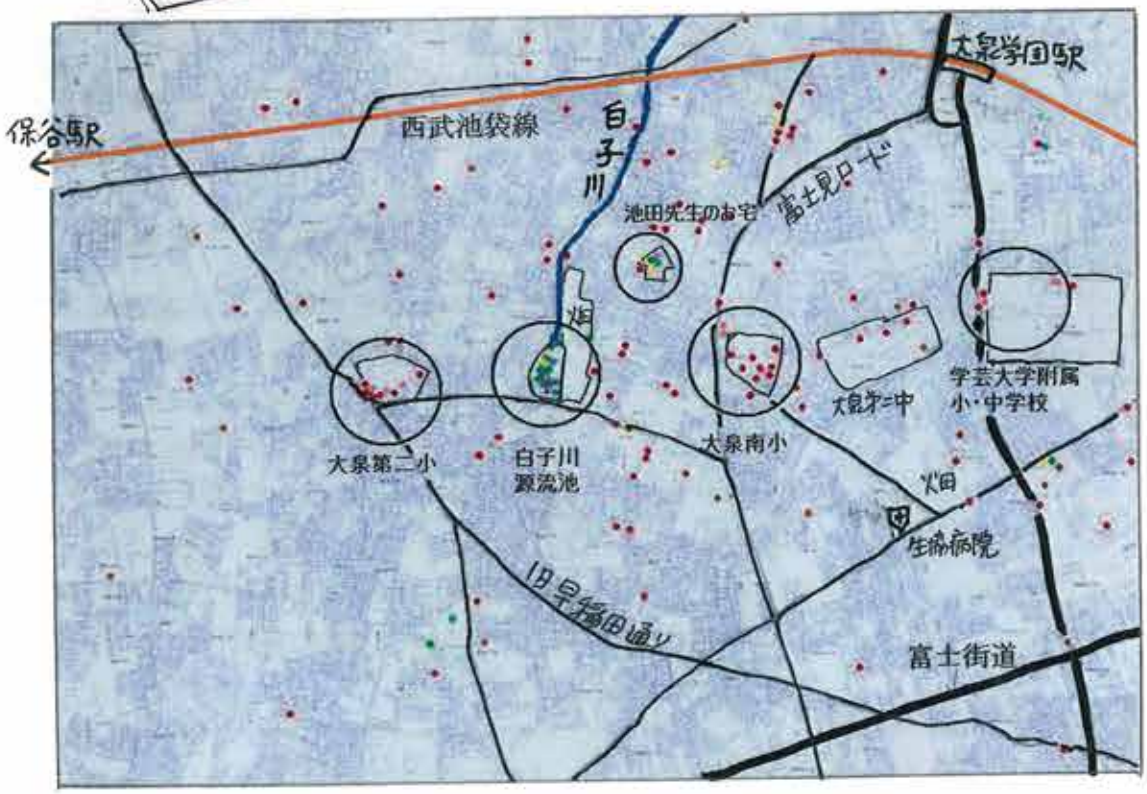
活動記録

9／6　アユ遡上調査（前田橋下、宮本橋下）
13　白子川源流まつり 実行委員会②
　大泉南小4年生白子川体験（3回目）
28　定例活動
30　TOTO来年度助成金申請書提出
10／4　白子川源流まつり 実行委員会③
10/12　ごたごた荘イベントに出展
26　第14回白子川源流まつり
31　TOTO助成金中間報告書提出
11/23　定例活動
12/17　会報第43号発行
28　定例活動（予定）



源流探歩④ 岡崎 一成

源流まつりで、源流池から半径 500mの範囲の大きな地図を掲示して、来場された方にカエルを目撃した地点にマークをつけてもらいました。



ヒキガエル 94 情報　**アマガエル** 10 情報
トウキョウダルマガエル・トノサマガエル 5 情報
オタマジャクシ 11 情報　**その他のカエル・カメ**など 8 情報
タヌキ 12 情報　合計 140 情報

オタマジャクシは、白子川源流池、大泉第二小の池、大泉南小の池、学芸大附属小・中学校の池とプール、民家１軒の目撃情報が寄せられました。白子川源流付近では学校が繁殖の大事な場所になっていることがわかりました。

おまけですが、タヌキについて 12 地点もの目撃情報が寄せられました。地図を見て、「大泉にタヌキがいるんだ！」と驚かれている方が多かったです。

源流まつりでカエルマップづくり

恒例、大南小４年生の発表

大塚さんが育てたクロメダカの放流

キャラメルサイコロで、水循環すごろく

アズマヒキガエルにタッチ！

年代ごとに撮影した地域の航空写真を展示

第14回　白子川源流まつり報告

60 をはるかに超える地元商店や団体、個人の協賛を得て、10 月 26 日（日）晴天にも恵まれ「第14回白子川源流まつり」を開催。ホトケドジョウの会・ふれあい広場、ボーイスカウト練馬 17 団、白子川源流水辺の会などでつくる実行委員会が主催しました。

当日はたくさんの参加者があり、会場内はにぎわいました。水辺の会が用意した「白子川グッズ」、わら筆・アクリルたわし、焼きそばも大好評で、10 万円を超える売上げがあり、今年も「NPO 法人宮城ジョネット」を通して、東日本大震災で被災された方への支援に充てられました。

当日のまつり会場となった井頭公園には、ステージと 16 のブースが設置され、ステージでは、横山聖子さんの清々しい司会のもと、コーラス、バンドの演奏、今年初めて行われたアユの放流をめぐる談議、大泉南小学校4年生による「白子川しらべ学習」の発表などがありました。子どもたちのグループごとの発表の中には、白子川を長く描きつづけてきた萩原さんへのインタビューをもとにしたユニークな「萩原さんクイズ」もあり、会場は大いにわきました。当の萩原さんは「女のお子さん4人からインタビューを受けました。都展に出展した私の三宝寺池の大きな絵にも関心を示してくれてね、うれしかった。お子さんたちの質問はしっかりしていて、私の方が十分こたえられなかったなあ」と恐縮していました。

また、カエルのブースでは、カエルを目撃した地点を直接地図にシールを貼ってもらう「カエルマップ」づくり（詳細は3ページ）と、手のひらにのせてじかに触る体験ができました。ブースを担当した池田さんは「今年は特に、ファミリーで触りに来た人が多かったよ」とうれしそうに語っていました。

わら筆トントン、自分好みの筆先に

鷲田さんのハモニカ＆ゴーバックサタデイズのコラボ演奏

水質検査のブースでは、“水辺を観察してみよう”という 10 項目の簡単なアンケートを実施、これに答えながら検査をしてもらった結果、「例年になく効率よく進めることができました。小学2・3年生が中心でしたが、50 人ほどが体験できました」（担当の望月さんのお話）とのことです。

まつりのために自然科学系の古書を集めて展示・販売してくださった地元「ポラン書房」の石田さんは、「自然科学のものしか持ってきていないのに色々な方が買ってくださいました。特に、大人の方がたくさん買ってくださいました。こんなふうに、子どもが遊べる所があるのはいいですね」と話していました。

毎年自然の素材を生かした可愛い作り物に取り組んでいるホトケドジョウの会・ふれあい広場のブースでは、今年はふれあい広場に生えているケヤキの枝を使ったアクセサリーづくりに挑戦。担当の塩崎さんは「準備も大変だったけど、会員も増えて手伝う人が多くなりました。当日は大人の人も注目してくれました。地域っぽいおまつりになりましたね。さらに、環境問題を取り上げていければいいですね」と感想を述べていました。

さらに、水辺の会発足当時、小学生会員として活躍、就職のため大泉をしばらく離れていた神山君。久しぶりに戻ってきて、今回カルガモミニプレート焼印を手伝ってくれました。その感想を「以前も焼印を手伝ったことがあったけど、むずかしかった。みなさんが以前と変わっていなくて、楽しかった」と語っていました。

今回も、たくさんの人が集まり作り上げた、まさに時を超え、世代を超えた「白子川源流まつり」であることを実感することができました。

（東谷　篤）

アユの源流談義で語る荒井さん

荒井さんが釣った冷凍アユを見る子どもたち

カルガモの焼印を手伝う神山くん

★☆創作★☆☆★☆☆☆

アズマヒキガエルの想い　シリーズ2

神様だけが知っている

池田　正

12月の初め、白子川源流の七福橋のらんかんに1匹のアズマヒキガエルが座って、源流のたまっていた水を不安げに見ていた。雨によって増水したため水はにごり、ヒメガマやカンガレイなど水生に茂る草の小さな島々に、水が浸水して、今にも埋没しようとしていた。そして、時々思いついたように、ブクブクと音を出して水面下や両側の石垣の下から出てくる泡が破れ、水面上に円形の波を広がらせている。湧き水がつくった波である。

ヒキガエルは、この様子を見ているうちにある物想いに耽った。

——何億年前からこの湧き水が出ていて、この水を頼りにして生きものたちが生きてきたんだ。その間に自然の神のちょっとしたイタズラで洪水になったこともあったけれど、苦しみながらもそれに負けずに祖先たちは、一生懸命に生きつづけてきたんだな

と。そこへ、ジジージジーと声がしたので、ヒキガエルははっと我にかえって辺りを見た。あまり聞きなれない鳴き声に驚いたのだった。もしかしたら天敵ではないか。恐ろしくなったヒキガエルは急いで友達のホトケドジョウを呼んで聞いた。するとドジョウは「ハハ…」と笑いながら、あの声はハクセキレイの鳴き声だ。餌探しにやってきたそうだ。彼も、この増水で餌が見つからず困っている。水辺で見つからないので、ヒトの生ごみの散乱している所やコンビニのパークまででかけているが、それでも足りないので、源流へ舞い戻ってきた、とのこと。

そんな話しの最中に、ヒメガマの茂っている1つの島から小さな虫が水の中に飛び込んできて、1メートル程離れたカンガレイの茂っている島へ泳いでいった。

よく見ると、それはイナゴのペアである。この類の昆虫たちは、とっくの昔に2世を誕生して死んでいるはずだが、この源流では未だ産卵場所が見つからないらしい。ヒメガマの島が増水のため浸水しているので、急いで「住居変更」となったのである。

そう言えば、先日、イノシシの親が4、5頭の子どもを連れだって海を泳いでいる姿がテレビで映し出された。以前の報道によれば、イノシシはときどき人家のある所へ出てきては餌探しをしたり、ヒトに襲いかかって傷をおわせたりしているとのことだったが、今度はイノシシの海渡りである。あのイノシシが塩分の多い海の荒波を乗り越えて次の島へよじ上っている姿には驚かされた。生きるための住居探しである。自ら自分たち家族のため生死をかけた生き様はイナゴの島探しとよく似ている。

アズマヒキガエルはイナゴが無事カンガレイの島へ着き、茂みの中へ入って姿を消しので、ほっと安心した。それは、溺れなかったため、そして、ハクセキレイに発見されなかったためである。

しかしまだヒキガエルの不安は残っていた。渇水期になったときの源流地は、見るに忍びない現状であることだ。源流地とは名ばかり、湧き水は年がたつごとに少なくなり、乾ききった土は生きものたちにとっては砂漠も同然。アズマヒキガエルは橋にかかげてある「一級河川白子川、起点地」の「起点地」が、やがて「起点地跡」に変えられるのではないかと思うときさえある。というのは、湧き水によって出来る円形の水の波がめっきり少なくなってきたからだ。

そこで、練馬で唯一湧き水によって創られたこの白子川を守るのは、ここに住んでいる我々生きものしかいない、とアズマヒキガエルは決意をあらたにしたのだった。その結果は自然の神様だけが知っているのである。

白子川現代史（第3回）

映画「柳川堀割物語」に学ぶ

（1987年制作）

片野令子

――川で水辺に「ふれる」。つまり、汚いものに、ちょっと触ってみるだけでは、水も川も感じることは出来ない。実際に川の中に入り、水を感じ、川を感じることは出来ないだろうか。公園課の職員はいろいろ情報を提供してくれるのだが、河川法の定める「許可」の範囲を越えられない。なんとももどかしい。

そんな時、北原白秋のふるさと福岡県の柳川市で水郷・柳川を復活させた映画に出会った。「柳川堀割物語」である。水郷・柳川は高度経済の波で暗渠化が進められた。ドンコ舟で水郷めぐりの案内をしている船頭や住民たちが立ち上がり、これに反対したけれども、首長選挙にも負け、開発は進められた。人が水から遠ざかると川にゴミが捨てられ、川は汚れて悪臭が漂い、おまけに地盤沈下して住居が傾くという問題が起こった。市の1人の職員が真摯にこの問題を受けとめ、地形と法律の解釈、条例のあり方などに苦戦しながらも、水郷・柳川を復活させる8年間の闘いをドキュメントとアニメで映画化したものである。監督は高畑勲氏（練馬区在住）、製作は宮崎駿氏である。

練馬区の川をよみがえらせようと勉強会をはじめた6人の議員でこの映画を見て、大いに問題意識を喚起させられた。まずは、洪水対策で50ミリ改修が進められている石神井川について政策提言をしようということになり、都の職員や区の担当職員に説明してもらい、石神井川上流部田無市の視察をし、遊水池・調節池などの勉強、政策提言の発表会などをやったのであった。

その結果、洪水を起こさないために、道路の浸透や各住宅での浸透対策が年次毎の計画で進められる必要があること、住宅建設時には浸透マスを設置すること、下水道を合流式でなく雨水と下水を分離すべきであること、川を身近にするために、水質の浄化をはかり人が川に入れるようにすること、またコンクリートの3面張り方式を進めることは金食い虫であり、今後70ミリ、100ミリ対応の計画があるのならば、なおさら“まち”全体をどうするのか、予算をどのように配分していくのか、についてのヴィジョンを描く必要があること、などの提言を行った。参加した職員からは好評で、「仕事がやりやすくなった」と言う声がきかれ、これによって、忌憚のない情報交換ができるようになった。白子川が大きな洪水に耐えられる理由は、後背地に畑が多いこと、また容量の大きい比丘尼調節池があり下流に洪水を起こさないようになっていることなども学んだ。

1985(S60)年、白子川流域の自治体が「白子川汚濁対策協議会」を設置していたが、白子川は当時もまだ、相変わらず生活排水の多い川であった。しかしこの提言をきっかけにして、1991(H3)年、東京都は本格的な汚染調査と対策会議を始めたのである。そしてその一環として、白子川の水質浄化のために宮の橋と一新橋の間に河川浄化装置が設置された。さて、試用期間とされた10年間が経ち、水質はどう変わったのであろうか。

（次号につづく）

白子川の生き物 42 / 横山 松栄

アオジ

スズメ目ホオジロ科ホオジロ属
（平凡社日本の野鳥６５０参照）

夏は、中国北東からシベリアにかけて繁殖し、冬日本で過ごす。山林、平地、河川敷、公園で見られる。写真に掲載されているのは、井頭公園にいた雌。雄は目の周りが黒い。地鳴き声は、「ヂッ、ヂッ」と地味である。区内では光が丘公園などでよく見かける。

みなさん 焼印 しませんか！

ときどき見かける みんなの白子川 のプレート。じつは、源流から西武線鉄橋までの間で川活動をしている「白子川源流・水辺の会」が作っているものです。ガスバーナーで高温にして焼きます。
地域のみなさん、一緒に作りましょう。
ぜひ、親子で参加してください。
※参加者には焼印の完成品をさしあげます。
人数制限あり。

2015年 2月 8日（日）午後 1:30～4:00/みどり広場
東大泉７丁目 26《東大泉第二保育園の東の森》

これからの活動予定

12/28（日） 定例活動
1/25（日） 定例活動
2/ 8（日） 焼印イベント
2/22（日） 定例活動
3/22（日） 定例活動
※運営会議は定例活動の前夜です

定例活動 毎月第４日曜 午後１：30～

どなたでも 川にはいれます！

編集後記

▼緑橋に 30 分ほどいたら、おばあちゃんに「いなげやはどこですかね?」とたずねられ、少年たちには「川に何かいるの?」と…。橋の上はにぎやかで、人なつっこい。明日はどの橋へ行こうかな。(ひ)
▼隠すことが「文化」的。くらしから死を、出産を、老いを遠ざけ、糞尿を見えなくし、火を隠し、川を暗渠にした。今、戦争を不可視にして政治が進んでゆく。俺はムキダシがいいな、白子川。(あ)
▼花を楽しむ白子川の川岸に、ときに悲しい生きものの亡骸を見る。命ある限りいつかはその時は来る。今静かに川辺に横たわるカモも、ここで暮らしここで一生を終えたのは自然なことなのだ。(さ)
▼源流まつりのわら筆ブースを担当している。筆の先は、水をつけながら木槌で叩いたわら。墨をつけ、半紙にむかうと、ちびちゃんでも神妙になる。その僅かな静寂がたまらなくいい。(け)

発 行　白子川源流・水辺の会
編 集　東谷 篤/東谷貞子/菅沢惠子
題 字　宮本沙海
発行部数　1,300 部
代 表　菅沢 博　03-3923-8430
練馬区南大泉 1-10-5
suga-lohas@jcom.home.ne.jp
http://www.geocities.jp/sirako_river/
※この会報は年３回発行しています
当会はTOTO水環境基金の助成を受けています